

抄 録

1-1

演題	自立排泄の重要性
副題	～あ～気持ちいい！～

法人名	
施設名	特別養護老人ホームシャローム

発表者名 (職種)	小島 武	都道府県	神奈川県
共同発表者	佐藤 惇也	住所	
共同発表者		TEL	
共同発表者		FAX	
共同発表者		メールアドレス	
共同発表者		URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	1984年8月より横須賀の走水という地域で50床から始まり、1988年5月に重度認知症専門棟を増設し、ショートステイも含めて120名の入所施設です。キリスト教福祉の理念である「いのちを敬い いのちを愛し、いのちに仕える」職員の育成につとめています。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

生活介護を行うにあたり、排泄介助は欠かす事のできない支援の一つです。トイレで排泄を行う事は、身体的側面、社会的側面、文化的側面で意義があり研究目的としました。

取り組んだ課題

トイレで排泄を行う事は、前傾姿勢をとり、足が開き、床に付く姿勢が解剖学的にも最も適しています。ADLが低下している利用者のトイレ介助時に「トイレで便が出る」ことにスポットを当て、失禁を減らし1回でも多くトイレでの排泄が出来る事を目標に取り組みを行いました。

具体的な取り組み

- ・前傾姿勢を取りやすい洋式トイレ用手摺りの設置
- ・後屈してしまい座位姿勢保持することが難しい方の為に背もたれの設置
- ・今回取り組みのためにピックアップした数名の利用者の排便パターンの再確認
- ・下剤服用、坐薬挿入以外での排便コントロールの為に離床直後の水分補給や乳酸菌飲料を使用
- ・排泄パターンを把握した上で利用者にあったタイミングにトイレ誘導し、1人10分から15分くらいを目安にトイレに座って頂く

活動の成果と評価

今回、入居棟コロナのクラスターもあり、職員の人材や時間をとることが難しくなり、取り組み期間が少ない中でしたが、トイレで座位を保つ事の重要性を理解し、トイレに座ることにより排便が出る事を支援することが出来ました。介護方法やトイレ内の用具等環境を整えることで、利用者の自立に繋がることを実感し、今後も継続して行っていく意義を見出す事が出来ました。

今後の課題

当施設だけではなく、どの施設も人的資源が限られています。取り組みが職員の負担だけになることな

く、今回の成功体験から他利用者の方にも継続して行なっていくことで、利用者の方のトイレでの排便、自立した排泄に少しでも近づけていければと願っています。

利用者のADLが向上することで、QOLの向上に繋がりを、職員のやりがいにも繋がる望ましい形となります。

参考資料など

排泄ケアナビ

<https://www.carenavi.jp/ja/home.html>

1-2

演題 施設で最期を迎えることの意義

副題 ～身寄りのない入居者様のお看取り～

法人名 社会福祉法人 珀寿会

施設名 秦野陽光園

発表者名 野下 惇
(職種) 介護職員

共同発表者 菊池 啓規

共同発表者

共同発表者

共同発表者

都道府県 神奈川県

住所 秦野市曾屋 1177-1

TEL 0463-72-7642

FAX 0463-72-7643

メールアドレス spmt4hv9@yahoo.co.jp

URL

今回の発表施設 またはサービスの 概要

秦野市内にある定員 100 名のユニット型特別養護老人ホーム。北に丹沢山系を望む。併設にはショートステイ、デイサービス、居宅介護支援事業所があり、総合的な介護相談窓口としての役割も担う。開設 11 年目、秦野市曾屋 1177-1。

研究の目的、PR ポイント

- ・ 2040 年問題 独り身の高齢者が増えることが明確である。特養では看取り介護が行われ、この先ご家族の支援も徐々に限られてくるのが考えられる。すでにご家族の支援が少ない入居者様もいる。看取り介護のポイントを紹介しつつ、今後を見据え問題提起する。

取り組んだ課題

- ・ ご家族の支援を受けられるケースの状況を整理
- ・ 一方、ご家族の支援が限られるケースも対比として状況整理
- ・ 限定的な支援の場合、施設としてできることは何か見出す

具体的な取り組み

- ・ 看取り介護としての対応
①毎日血圧測定②部屋移動、ステーションの近くに置く③むせ注意：誤嚥の危険性を鑑み口腔ケアはウエットティッシュを使用④食事の少ない入居者様に工夫して提供⑤居室環境の整備、ご家族からの提供品を居室内に設置・ベッドの配置を工夫⑥ご家族に趣向品などを依頼・・・お酒、水分ゼリー、高カロリーゼリー、口腔ケアウエットティッシュ、アイス、音楽(民謡などの CD)
- ・ 看取り期となった、高齢の妹様しかいない入居者様への支援①厨房からプリン、とけないアイスを提供②医療保険からエンシュア、プロペトを処方③エアーマットの使用④施設持ちのクッションを使用して褥瘡予防も想定

活動の成果と評価

- ・ ささやかではあるが、お酒をガーゼに湿らせて口腔内で味わっていただいた。ご本人がそれで満足いただけたか、確認できなかったが、施設内での意識が変わった。最初から無理とせずに、方法を探っていき実現できることもあると認識できた。ご家族にも喜んでいただけた。
- ・ 看取り介護は施設内で定着されている。特養の大きな役割の一つで、地域の期待に応えるはたらき

である。その意義が職員間で芽生えている。

- ・ 徐々にではあるが、今後身寄りのない入居者様のお看取りをする時の経験値となった。

今後の課題

- ・ 施設内外に諸問題あり
①身寄りがなくご本人の意思も確認できない状態で、施設が思い通りにやって良いのか②財産などを一部預かり、必要物品を購入することはできる。しかし、だれがそれを承認してくれるのか。また、それは合法なのか。③低年金の入居者様もいる。貯蓄が少ない場合のやりくりはどうするのか。④ 2040 年に高齢者の年齢に達する人たちは就職氷河期である。所得が少なく、やはり低年金が想定される。施設入所自体、困難とされる。⑤施設の持ち出しで増える独り身の入居者様をどこまで支えられるか。

1-3

演題	立てる！歩ける！転ばない！
副題	～『ご利用者が元気になる』施設を目指して～

機能訓練	法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
転倒事故	施設名	わかたけ都筑

発表者名 (職種)	山下 亘 その他	都道府県	神奈川県
共同発表者	石井 浩行	住所	横浜市都筑区川和町 19-1
共同発表者		TEL	045-482-3811
共同発表者		FAX	045-482-3810
共同発表者		メールアドレス	wakataketsuzuki@wakatake.or.jp
共同発表者		URL	https://wakatake.net/category/facility/tsuzuki/

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市都筑区に 2023 年 4 月に開設したユニット型の介護老人福祉施設です（入居 110 名、SS10 名）。「職員一丸となって人を幸せにします」「人が大切にされる世の中を創ります」という法人理念のもと、日々の支援に努めています。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

当施設は 2023 年 4 月に開設し、『ご利用者が元気になる』施設を目指して、ICT 機器や福祉用具を積極的に導入している。また、広い機能訓練室を設け、2 名のリハビリ専門職による機能訓練を提供している。LIFE からのフィードバックデータによると、当施設のご利用者は特養の中でも ADL 自立度が比較的高い傾向にあることが示された。認知機能や身体機能の低下が見られるご利用者の中でも、居室内を単独歩行で生活している方は少なくない。しかし、歩行が不安定なご利用者の動作を全て察知し、ケアスタッフが常に即時対応することは困難であり、転倒事故の予防は大きな課題となっていた。そこで機能訓練部門では、「立つ・歩く」をテーマに個別機能訓練や生活リハビリ、居室環境の整備等の取り組みを実施してきた。今回、これらの取り組みと転倒予防の関係性を明らかにすることを研究の目的とした。

取り組んだ課題

当施設では開設当初から、ご利用者が単独歩行され、居室やリビングでの転倒事故が散見されていた。「転倒は生活機能の低下や死亡につながる。」とされており¹⁾、転倒事故を減らすことは施設高齢者の QOL・ADL を維持において重要な課題である。そこで本研究では、転倒事故の主な要因を「立位歩行能力の低下」と「居室内移動の不安定性」と考え、以下の取り組みを実施した。

具体的な取り組み

- ① 歩行機能の維持・向上の取り組み
⇒ 個別機能訓練（「立つ・歩く」を中心に介入）
 - ・ リハビリ専門職による機能評価
 - ・ 機能訓練室や訓練機器の活用
- ② 居室内移動の安定性向上に対する取り組み
⇒ 居室環境の支援・調整
 - ・ 居室内での動線の確認や移動能力の評価
 - ・ 手すり等の福祉用具の検討、設置
- ③ ケアスタッフと連携
⇒ 情報共有（PDCA サイクルの実施）
 - ・ 生活リハビリの介入、モニタリング

- ・ カンファレンスの参加

活動の成果と評価

「立つ・歩く」をテーマとした個別機能訓練や生活リハビリに取り組むことで、ご利用者の移動能力の維持・向上に繋げることができた。同時に、居室内の環境整備や福祉用具の活用をケアスタッフと協力して取り組むことで、転倒事故の件数が減少した。身体機能や活動性の向上は、同時に歩行の機会が増すことで転倒リスクが高まることが懸念される。そのため、機能訓練だけではなく、ケアスタッフと協力し、ご利用者が生活場面において安全かつ安心して動けるよう、環境整備等を行ったことが、転倒事故の減少に繋がったと考えられる。ご利用者の転倒を予防し、QOL の維持・向上を図るためには、多職種が連携し、「できる ADL」を「している ADL」に近づける支援が重要と考える。

今後の課題

- ・ 個別機能訓練と生活リハビリの連携を強化
- ・ 心身機能の変化に伴う福祉用具や環境の見直し
- ・ 導入器具のモニタリングの継続や安全管理の徹底
- ・ 手すりの設置等の環境整備が難しい場所の対応

参考資料など

日本老年医学会：
介護施設内での転倒に関するステートメント

1-4

演題	褥瘡ゼロを目指して
副題	～チームケア×褥瘡予防対策＝みんなの笑顔～

法人名	社会福祉法人 藤嶺会
施設名	弥生苑

発表者名 (職種)	松村 奈津実 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者		住所	横浜市旭区上川井町 1241-1
共同発表者		TEL	045-922-5141
共同発表者		FAX	045-921-5041
共同発表者		メールアドレス	at-sakuma-01@toureikai.jp
共同発表者		URL	https://toureikai.jp/

今回の発表施設 またはサービスの 概要	弥生苑は平成9年5月に開設した従来型の特別養護老人ホームです。本入所84床、短期入所6床の全90床であり、平均要介護度は4.3（令和7年4月現在） やさしさ、思いやり、ふれあいを法人理念とし、日々取り組みを行っています。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

近年、特別養護老人ホームでは介護度の重度化が進行しています。その中で、日々生活の支援をしている私たち介護職員だけでは、取り組み内容にも限りがあります。お客様が健やかで豊かな生活を送る為の大切な一つのポイントとして、チームケアが挙げられます。今回は、チームケア×褥瘡予防対策という点に注目して研究発表を行います。

取り組んだ課題

近年、寝たきりの方や、食事や入浴の時のみ離床する方の増加など、介護度の重度化が進んでいる。このままの状態では、褥瘡発生率が高くなる為、医師、看護師、生活相談員、介護支援専門員、管理栄養士、介護職員と情報共有を行い、チームケアにて褥瘡予防の支援を行った。
又、ご家族様からの理解を得る事も重要であり、信頼関係の構築も必要となる為、介護職員としてご家族様へ出来るアプローチを検討し取り組んだ。

具体的な取り組み

- ① 月1回の会議にて、看護師より褥瘡発生者の対応報告、管理栄養士より栄養面の報告、介護職員より各委員会の報告等の情報をもとに、褥瘡評価の見直しを実施。
- ② 会議にてお客様のベッドマットの見直しを検討。
- ③ 褥瘡発生者は毎週金曜日に看護師と褥瘡評価を行い、処置内容や対応の見直しを実施。
- ④ 年2回、褥瘡予防研修の実施。
- ⑤ お客様の写真撮影を行い、ご家族様への近況報告の一環として、カードの作成。

活動の成果と評価

- ・チームケアで情報共有する事で、褥瘡発生時の周知や対応も早期に役割を果たせており、早期治療にも繋げる事が出来た。
- ・褥瘡予防研修を通して、介護職員の褥瘡予防に関する知識・意識の向上や介助技術の向上に繋げる事が出来た。
- ・コロナ禍で面会に制限がかかっていた為、ご家族

様より「普段の様子が知れて嬉しい」等の嬉しい声を頂くことができ、信頼関係の構築に繋げる事が出来た。

今後の課題

- ・褥瘡発生者数はわずかに増加している。好発部位である臀部などへの褥瘡予防への意識は高まったが、外反母趾や踵の褥瘡発生者も数名見受けられた。その為、都度振り返り何が原因であったのかリスクマネジメントとして検討する必要があると思われる。
- ・写真撮影やカードの作成も、まだ職員間では定着しておらず、一定の職員のみでの対応となっている為、今後フロア全体として取り組めるような工夫が必要と思われる。

1-5

演題 摂食困難事例をふりかえって

副題 ～新型コロナに感染した利用者様の回復まで～

食事

新型コロナ

法人名 社会福祉法人 祥風会

施設名 芳徳の郷ほなみ

発表者名 鈴木 苗緒美
(職種) 介護職員

共同発表者

共同発表者

共同発表者

共同発表者

都道府県 神奈川県

住所 小田原市栢山 3565

TEL 0465-39-2231

FAX 0465-39-2230

メールアドレス honami@shofukai.com

URL https://shofukai.com/

今回の発表施設 またはサービスの 概要

歴史情緒豊かな小田原の市街地に位置し、静寂の中に活力のある栢山の地でのびのびと生活して頂く事を理念としながら、個室ユニット型特養として 90 名の方々を、明るく家庭的な雰囲気の中で日常生活が送れるよう支援しています。

研究の目的、PR ポイント

■研究背景・目的

新型コロナウイルスのクラスター下で摂食困難となった利用者のケアを 4 か月間行った。その中で挙げた以下の課題の解決に取り組んだ。

1. 摂食困難となった原因の究明
2. その他の背景要因の洗い出し
3. 行ったケアの評価
4. どのように今後に活かせるのか

■研究の価値性

通常、寛解までは様々な取り組みがなされるが、本研究は回復後にケアを振り返り省察・評価したという点に新規性を挙げる。また、その振り返りが、対象利用者への理解の深化とその後のケアの改善、感染症の集団感染への備え意識の醸成、ユニット職員の知識・技術の向上へつながった点で有効性があると考えられる。さらに、新型コロナウイルスという新たな疾病の一症例を提供するとともに、それに対するケアの一例も示す。

取り組んだ課題

具体的な取り組み

■対象利用者

96 歳、女性、食事形態 常食、平均摂取割合 90%、2023 年 1 月新型コロナ陽性

■取り組みステップ

1. 状況の把握

介護ソフトから種々のデータを取り出し、エクセルの表やグラフにまとめ、摂食・摂水の落ちていた期間と症状を把握。食事量は 3 割、水分は 7 割まで落ち、元の水準に回復したのは 4 か月後だった。また、症状は疲労感・倦怠感が 4 か月、食欲不振が 3 か月、嚥下困難や吐き出しが 2 か月半続いた。

2. 4 か月間のケアと経過の振り返り

3. 原因の究明

国際生活機能分類（ICF）をもとに、コロナ罹患前後の利用者および周辺環境の変化を確認し、そこから摂食・摂水困難となった原因を考えた。原因

として、①新型コロナと対象利用者の持病や体質との連動、②生活不活発病のリスクの上昇、③食事介助する介護職員の個々の技量が重要となる状況だったことを挙げた。

4. ケアの評価と今後へ向けた取り組み

摂食・摂水困難となった原因の考察とケアの評価を受け、次の事を行った。

- ① ユニット内でのフィードバックと、利用者の身体状況や生活への希望の再確認
- ② 今後のケア方針の検討と実施
- ③ 研究結果を施設内でシェアし、感染症の集団感染への備え意識を醸成

活動の成果と評価

■ 2 年経過時（2025 年 4 月）の対象者の摂食状況食事摂取割合 86%、食事形態 刻み食＋高栄養ドリンク、自立度 半介助

■評価

認知症の進行により完全な自立摂取は難しくなりつつあるものの、摂取量はコロナ罹患前とほぼ同じ水準を保っている。食事形態はコロナ寛解時のミキサー食からひとつ戻した刻み食を摂っている。以上の成果から、本取り組みは成功したものと言える。

今後の課題

本取り組みが成功したので、他の利用者に対しても同様の試みを行っていききたい。また、多職種連携を更に進め、研究の全段階で看護師・栄養士との協力体制を築きたい。

参考資料など

“国際生活機能分類（ICF）”.World Health Organization.

<https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/42407/9241545429-jpn.pdf?sequence=313&isAllowed=y>

1-6

演題	入浴・トイレ拒否の多い方への取り組み
副題	～ユマニチュード技法の実践、評価～

認知症

法人名	社会福祉法人 麗寿会
施設名	ふれあいの泉

発表者名 (職種)	棚原 明久 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者	伊藤 力太	住所	鎌倉市今泉 2-10-1
共同発表者		TEL	0467-46-9811
共同発表者		FAX	0467-42-7036
共同発表者		メールアドレス	izumi@reijukai.or.jp
共同発表者		URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	ユニット型特養、長期 74 名、短期 10 名 法人として認知症ケア向上のため認知症ケア推進委員会を立ち上げユマニチュードの実践を 柱として取り組みを行っています。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

BPSD（介護拒否）がある利用者様に対しなぜ介護拒否が多いのか、職員皆で考え、NPI 評価尺度・ユマニチュードを用いて実践・効果を検証していく。認知症の利用者様の立場になってケアできているか実践をとらえてその結果をまとめました。

取り組んだ課題

朝方・夜間は介護拒否少なく日中になると入浴・トイレ拒否など介護拒否が多い利用者様に対しどうアプローチ・ケアすれば安心して快適な生活が過ごせるか考えました。
その取り組みについて紹介します。

具体的な取り組み

- ① ユニット職員の中で困っていることあげて頂き、職員間で課題を共有し対象者を決める。
- ② 課題のある対象者について、現在どういうケアをしているか、率直な意見を出して頂く。
- ③ 現在のケアの仕方に問題ないか環境面も含め考え、意見を出して頂いた後、今一度ユマニチュードの実践・NPI 評価尺度用いて、フロア全体で実践行っていく。
- ④ 約 1 ヶ月弱実践行。まず最初の 3 週間実践行い、ユニット職員で振り返り再アセスメント行。ケアの仕方や変更点も出し、4 週目以降実践行。実践前と実践後 NPI 評価をユニットリーダー・ユニット職員で行。ケア記録の用紙も作成し、どういう反応があったかも書いて頂く
- ⑤ 約 1 ヶ月弱実践を行った後、どういう結果・効果があったか検証・評価をユニットリーダー含め行っていく。

活動の成果と評価

- ・約 1 ヶ月弱ユマニチュード実践・統一したケアを行う事によって介護拒否、トイレ・入浴拒否の回数は大きく減りました。(実践前 2 週間で 17 回声かけし、10 回拒否。実践期間中 1 ヶ月弱で 58 回声掛けし 17 拒否)笑顔の表情も増えました。
- ・実践前は職員が立った状態で声掛けすること多く、

周囲の環境にも配慮できてなかったユマニチュードの 4 つの柱「見る」「話す」「触れる」ができてなかった。

- ・実践前は A 様が不安を感じ行動や態度がそのまま出ていたことがわかった。
- ・A 様の不安を取り除く事によって、信頼関係を築けることがわかった。
- ・声かけを工夫するなどして入浴に行きやすい雰囲気をつくるのも大事でした。ただ声かけするのではなく好きな食べ物の話や昔話をすることによって表情が穏やかなになり入浴・トイレに行きやすくなりました。

今後の課題

職員が A 様に対し「今日はこういう感じだからしょうがない」と思うのではなくその原因は何か職員皆で考え普段の何気ない表情や行動を見逃さない事が大事である。例として他の利用者様のご家族様が多く来た日などは表情が陰しく落ち着かない事多いので、気分転換に一緒に窓の方に行き桜を見に行ったり、一緒に 2 人でお話したり A 様の気分を変えるなどの A 様の気持ちに寄り添う事が重要。また普段の何気ない会話・笑い話（ジョーク）などでも信頼関係が築けるので、信頼関係を築くことによってユマニチュードがより活かせる事がわかった。まずは A 様に職員の思いを伝え、わかってもらうことがケアの第一歩である。

参考資料など

ユマニチュード入門

1-7

演題	「入る入浴」から「入りたい入浴」へ
副題	～「今度お風呂いつ？」をもらうために～

入浴ケア
入りたい入浴

法人名	社会福祉法人 育明会
施設名	レジデンシャル常盤台

発表者名 (職種)	廣瀬 真寿美 介護職員
共同発表者	滝澤 素子
共同発表者	入浴ケア検討委員会
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市保土ヶ谷区常盤台 74 番 7
TEL	045-348-8001
FAX	045-348-8002
メールアドレス	info-tokiwadai@ikumeikai.net
URL	https://www.ikumeikai.net/tokiwadai/

今回の発表施設 またはサービスの 概要	平成 23 年 4 月開設、本入居 160 床ショートステイ 20 床のユニット型特養です。 開設当初より《リスペクトケア》を合言葉に、最期まで「その人がその人らしく」過ごして 頂ける様、寄り添ったケアに取り組んでいます。
---------------------------	---

研究の目的、PR ポイント

毎月第 2 金曜日に委員会を開催し、ご利用者に満足して頂ける入浴について話し合いを行う。また、いかに入浴を安心、安全に介助していくか検討を行っている。

取り組んだ課題

1. 季節に合わせた温泉を決定し入浴を実施。予定表を作成し番街毎にポスターを作成、入浴剤・CD の準備等は委員で行った。ポスターは事前に各番街に提示しご利用者、職員へ周知した。
2. 入浴誘導表の大幅な変更を行い、5 月度より変更した誘導表で実施した。
3. 事故防止ポスターを浴室へ掲示した。
4. FJ 浴用に枕を新規購入した。
5. 浴室の暖簾を新調した。

具体的な取り組み

1. 2023 年度の温泉
4 月塩原温泉、5 月菖蒲湯、6 月水上温泉、7 月奥更科温泉、8 月水上温泉、9 月塩原温泉、10 月和山温泉、11 月箱根温泉、12 月ゆず湯
2. 同じ番街のご利用者が入浴できるよう、入浴者の変更、順番、浴室について昨年度から協議検討を行い、5 月以降より新誘導表で実施した。
3. 浴室にご利用者を一人にしてしまう事故が続いたため、浴室に事故防止ポスターを掲示し、職員へ周知した。
4. FJ 用の枕はビーズクッションを使用していたが、安定せず浴槽での姿勢保持が難しかったため、バスピローを新規購入した。
5. 浴室前の、のれんに汚れが目立っていたので、施設長へ相談させて頂き 12 年ぶりに新調しました。

活動の成果と評価

1. 湯めぐり温泉のポスターや CD 作成は、各温泉らしさを感じて頂けたと思う。ご利用者には変わり湯を肌で感じて頂き香り色合いも楽しんで頂いた。特に、ゆず湯では、事前に爪楊枝でゆずに穴をあけ香りを高めてから湯船に入れた。「良いにおい」

「いつもこのお風呂入りたい」「温まる」「肌がつるつる」と感想を頂き、香りと共に形、触感、効果を楽しんでリラックスして頂けたと思う。

2. 同じ番街のご利用者を誘導することによって、移動時間が短縮し、感染症対策等で中止になっても調整が行いやすかった。
3. 浴室入り口に事故防止ポスターを掲示することによって、職員の意識付けに効果的だった。掲示以降、入浴、浴室での事故は無くなった。
4. バスピロー使用後は、どんな姿勢にもフィットし、気持ち良さそうに眼を瞑って入浴されているご利用者が多くみられている。また、自立機能があり、水切りよく、カビの心配いらずで、ビーズクッションから変更して「良かった」と職員から声を頂いている。今後は一般浴リフト浴にも使用の検討を考えている。
5. 12 年間使用し、色が薄れてしまったり、汚れや穴があったりしていたため、先月新調しました。緑、青、オレンジと鮮やかな番街チームカラーで揃え、心機一転、綺麗なのれんで、ご利用者をお迎えしている。

今後の課題

湯めぐり温泉は次年度も引き続き実施し、温泉気分を楽しんで頂き、「入りたい」と思っただけのように快適な時間を提供していきたい。また、入浴の人数や調整、物品を今後も検討し、楽しみにして頂けるようケアの質の向上を図り、「気持ちいい」「今度いつ」の言葉をもらえる様努めていきたい。

1-8

演題 心をつなぐバリデーション

副題 ～自分も変われば認知症の方も変わる～

寄り添うケア

介護技術

法人名 社会福祉法人 緑成会

施設名 新緑の郷

発表者名 平 龍
(職種) 介護職員

共同発表者 村上 賢

共同発表者

共同発表者

共同発表者

都道府県 神奈川県

住所 川崎市高津区久末 473 番地 14

TEL 044-948-7025

FAX 044-948-7023

メールアドレス nakajima@midorinosato.or.jp

URL http://ryokuseikai-yokohama.jp

今回の発表施設
またはサービスの
概要

特別養護老人ホーム 新緑の郷 (川崎市高津区久末)
・入居者定員 本入所 128 名 ショートステイ 8 名
・2F～3F 従来型 88 床 ショートステイ 8 床
・4F～5F ユニット型 40 床
・人への思いやりを大切に、良い施設づくりを目指しています。

研究の目的、PR ポイント

私たちが働いている認知症対応フロアでは介護歴 5 年未満の職員多く、アンケートを行った結果認知症の方への対応に不安を感じる、自信がもてない職員が半数以上見られた。

その為、帰宅願望が見られた際に「お泊りですよ」、「ご飯食べてから」とやり過ごすケア (パッシングケア) を行っていることが多く、対応に困っている職員見られていた。その為、認知症ケアの技法のひとつである「バリデーション」を学んだ。

バリデーション導入前後で職員のケアにどのような変化があり、ご入居者の気持ちに寄り添ったケアをすることで変化があったか検証した。

取り組んだ課題

- ・バリデーション導入前後で職員の認知症の方に対するケアの変化
- ・帰宅願望や不穏時に対してパッシングケアをしていることが多く見られている
- ・介護歴が短い方が多く、介護職として自信がない職員が多い

具体的な取り組み

- ・バリデーション導入前後の変化の検証
- ・検証期間 2024 年 10 月～2025 年 5 月
- ・検証人数ー入居者延べ 40 名、介護職員 19 名

活動の成果と評価

- ・入居者様に思いに寄り添う事で安心感を与えられた
- ・パッシングケアをする職員を減らせた
- ・介護職としての自信向上

今後の課題

- ・夜間帯実践しやすいが日中帯は取り組むことが出来ていないため取り組んでいきたい
- ・施設全体で認知症の方に寄り添ったケアを浸透できるように取り組む

参考資料など

認知症の方とのコミュニケーション法「バリデーション」とは？ | 介護の便利帖 | あずみ苑一介護施設・有料老人ホーム レオパレス 21 グループ
<https://www.azumien.jp/contents/method/00044.html>

1-9

演題	道具がなくても始められる
副題	～ノーリフトケア導入のリアル～

ノーリフト
腰痛予防対策

法人名	社会福祉法人 川崎市社会福祉事業団
施設名	片平長寿の里

発表者名 (職種)	大家 志保子 介護支援専門員	都道府県	神奈川県
共同発表者	市毛 仁美	住所	川崎市麻生区片平 1829
共同発表者	堀部 貴則	TEL	044-455-4188
共同発表者	増子 元	FAX	044-455-4190
共同発表者	田中 由美	メールアドレス	katahira@kfj.or.jp
		URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要

平成 23 年 4 月開所。従来型（90 床）、ユニット型（40 床）、ショートステイ（10 床）の併設型施設。理念のもと寄り添う介護と地域に開かれた施設を目指す。

研究の目的、PR ポイント

介護中、左前十字靭帯を損傷から手術、リハビリを経て復職した介護主任が「こんなに痛く、辛い思いを他の職員さんには経験して欲しくない！」と強く感じたことをきっかけにノーリフト推進チームを立ちあげました。今回の発表では、2 年間の活動内容に加え、なかなか職員へ浸透しない現状やリアルをお伝えする事で、ケアのあり方を考えるきっかけや導入の後押しになればという思いを込めています。それに加えてノーリフトケアが、「当たり前」の介護として広がって欲しいという願いを込めています。

取り組んだ課題

職員の腰痛や怪我が増加していること、さらに利用者の移乗時に怪我が発生するケースもみられることから、ノーリフトケアの必要性について着目した。しかし、ノーリフトケアの重要性については理解があるものの、実際に現場でどのように実践していけるのかが課題となった。そこで職員がノーリフトケアを実践できる環境作りや意識改革に取り組んだ。

具体的な取り組み

- ① ノーリフトに興味・関心のある職員を集め、ノーリフト推進チームを発足（PT もメンバーとなる）
- ② ノーリフトケアの理念の共有
- ③ 職員の体調アンケートを実施し腰痛や体調の確認
- ④ 他施設で実践している職員に協力を依頼し研修を開催（手軽に始められる移乗方法など）
- ⑤ 福祉用具の安全性や車イスの乗り心地の確認
- ⑥ 福祉用具業者に依頼し用具の取扱いデモを実施
- ⑦ 最も必要な用具を選定・導入
- ⑧ チームから委員会へ発展そしてノーリフト宣言へ

活動の成果と評価

ノーリフト推進チームの発足後、研修の企画や講師の依頼、職員へのアンケートを実施を通して、職員の意識の中にノーリフトケアの必要性が徐々に浸透していった。またこれまで行なっていた介護の方法を振り返る機会にもつながった。さらに福祉用具の活用を進めてきたことで、職員・利用者双方の怪我

や事故が減少する成果が見られた。

今後の課題

まだ、取り組み途中であるため、今後もノーリフトケアの理念を職員に浸透させていく必要がある新規採用職員にも継続的に伝えていかなければならない。あわせて福祉用具のどう縫うに向けて使用根拠を明確にし、必要な用具を適切に導入していく事が課題である。今後もノーリフトケアへの取り組みをさまざまな場で発信し、職員も利用者も「心も体も元気に介護ができる・受けられる」環境を整えていきたい。ノーリフトケアを業界の当たり前にし福祉・介護の未来を変えていきたい。

参考資料など

ノーリフティング手引書
「ノーリフティング導入における目的と現状把握」